

北野天満宮

北野天満宮は、菅原道真公をご祭神としておまつりする全国約1万2000社の天満宮、天神社の総本社である。

天神信仰の発祥の地であり、親しみをこめて「北野の天神さん」、「北野さん」と呼ばれている。



公式ホームページにより、北野天満宮の謂れを見てみたい。

北野天満宮の創建は、平安時代中頃の天暦元年（947）に、西ノ京に住んでいた多治比文子や近江国（滋賀県）比良宮の神主神良種、北野朝日寺の僧最珍らが当所に神殿を建て、菅原道真公をおまつりしたのが始まりとされます。

その後、藤原氏により大規模な社殿の造営があり、永延元年（987）に一條天皇の勅使が派遣され、国家の平安が祈念されました。この時から「北野天満天神」の神号が認められ、

寛弘元年（1004）の一條天皇の行幸をはじめ、代々皇室のご崇敬をうけ、国家国民を守護する靈験あらたかな神として崇められてきました。

江戸時代には、各地に読み書き算盤を教える寺子屋が普及し、その教室に天神さまがおまつりされたり、道真公のお姿を描いた「御神影」が掲げられて、学業成就や武芸上達が祈られてきました。このことがのちに「学問の神さま」、「芸能の神さま」として皆さまに広く知られるようになった所以です。

上記の中で述べられている比良宮の神主神良種、北野朝日寺の僧最珍については、ネットで調べる限り、どのような人であったのかが判らない。そこで多治比文子を手掛かりに、もう少し北野天満宮創建の謂れについて調べてみたい。

涉成園(東本願寺の枳殻邸)の北西角のすぐ近くに「文子天満宮」(あやこてんまぐう)がある。

町屋の中に埋もれたような目立たないやや小規模な神社で、神社正面の鳥居前に「北野天満宮の前身神社 天神信仰発祥の神社」と刻まれた石碑が建っている。また入口の看板(表札)をはじめ各所に「天神信仰発祥の神社」の文字が見られる。



(<http://京都のitベンチャーで働く女の写真日記.com/kiji.html?entry=2013-02-15-01> による)

そして鳥居の右に「天神信仰発祥の地」という碑がある。



(<https://ameblo.jp/masa-20160101/entry-12203209362.html> による)

北野天満宮の前身神社

天神信仰発祥の神社

北野天満宮宮司浅井與四郎謹書

平成六年六月吉日

菅原道真公は太宰府へ左遷の途次離別に際し菅原道真公自ら彫られた神像を乳母の文子に託した。文子受け日夜崇めまつった。これが天神信仰発祥の始まりであり当神社の起源であります。

天慶五年(942)多治比の文子は菅原道真公の託宣(おつげ)をうけた。天曆元年(947)六月九日今の北野の地天満宮の創建となった。

北野天満宮より前におまつり申し上げた次第から「北野天満宮の前身神社」といわれ多治比の文子が菅原道真公の信仰の対象として最初に崇めおまつり申し上げましたことから「天神信仰発祥の神社」といわれる由縁

天神信仰発祥の神社 北野天満宮の前身神社

菅公生誕千百五十年祭建立

文子天満宮

宮司 中小路宗広

碑文

(<http://hamadayori.com/hass-col/religion/TenjinSinko.htm> による)

また、神社の中に入ると、次のような説明文が掲げられている。

文子天満宮 あやこてんまんぐう

祭神として菅原道真を祀り、洛陽天満宮二十五社の一つに数えられている。

社伝によれば、太宰府(福岡県)に左遷された道真は、延喜三年(903)に五十九歳で没したが、没後、道真の乳母であった多治比(たじひ)の文子は、「われを右近の馬場に祀れ」との道真の託宣(おつげ)を受けたという。しかし、文子は貧しく、社殿を建立することができず、右京七条二坊の自宅に小さな祠を建て、道真を祀ったといわれている。これが当社の起こりで、天神信仰発祥の神社、また北野天満宮の前身とも伝えられている。

以後、天明、安政、元治の大火で類焼したが、その都度再建され、明治に至り、村社に列せられた。現在の社殿は、大正七年(1918)に造営されたものである。毎年四月十六日に近い第三日曜日に、例祭が執り行われる。

京都市

その数年後、比良宮の神主神良種、北野朝日寺の僧最珍らが多治比文子に力を貸して、多治比文子の建てたその小さな祠をもとに、御霊移しをして、現在の[文子天満宮御旅所](#)がで

きたのだと思う。それが明治になって、北野天満宮境内に、現在の文子天満宮が創建された。



北野天満宮境内にある文子天満宮

(http://takaoka.zening.info/Kyoto/Kitano_tenmangu_Shrine/Ayako_temnamgu.htm による)

さて、上記の公式ホームページによると、天曆元年（947）以～永延元年（987）の間に、藤原氏により大規模な社殿の造営が行われたということが読み取れるが、その時期が明確でないし、また何故藤原氏により大規模な社殿の造営が行われたのかその理由も不明である。そこでいかにおいて、それらのことを説明しておきたい。

「北の天神縁起」などによると、菅原道真が死んで幾月も経たないある夏の夜、道真の靈魂が比叡山の僧坊に現れて、尊意（そんい。道真が仏教を学んだ師）にこれから都に出没

し、怨みを復讐ではらす決意を述べ、邪魔をしないようお願いをしたのだそうだ。・・・その後、道真の怨霊は暴れまくることになる。

その後数年経った908年10月7日、道真配流の首謀者のひとり藤原菅根（すがね）が54才でなくなったが、都では道真の怨霊の祟りだという噂が流れたが、翌年、道真の怨霊はいよいよ核心に迫っていく。

道真配流の張本人・藤原時平は、すでにこのとき病床にあったが、天竺渡来の妙薬も効き目がなく、また陰陽師（おんみょうし）の祈祷の効き目もなかったので、文章（もんじょう）博士・三善清行（きよゆき）は、自分の長男であり当時都でもっとも有名であったかの浄蔵（じょうぞう）に加持祈祷をさせることになった。

ところが、4月4日のこと、清行が時平のところに見舞いに来ると、道真の霊は、時平の左右の耳から二匹の青竜となって現れ、次のように語りかけた。

「無実の罪で配流となり、太宰府で死んだ私は、今や天帝（梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく）の許可を得たので、怨敵に復讐を加えようと決断をした。なのにおまえの息子浄蔵は頻繁に時平を加持祈祷している。どうせ無駄なことだから、やめさせよ。」

鬼神を操って冥界のことにも明るい清行は、即座に理解し、浄蔵に時平邸からの退出を命じ、自分みずからも退出したのだが、まもなく時平の命は絶えたという。

時平の命を奪った道真の霊は、その後ますます激しさを加え、時平の子孫たちを次々と死に追いやり、遂に923年、醍醐天皇の皇太子の命まで奪うに至る。

そして930年6月26日には、清涼殿（せいりょうでん）に落雷が起こった。これが凄かったようだ。昼すぎの頃、愛宕山の上より起こった黒雲はたちまち雨を降らせ、にわかには雷鳴を轟かして清涼殿の上に雷を落とし、神火を放った。

この結果、殿上の間に侍していた大納言藤原清貫は胸を焼かれて死亡し、右中弁平希世（まれよ）の顔は焼けた。また紫宸殿（ししんでん）にいた者のうち、右兵衛佐美努忠包（みぬのただかね）は髪が焼けて死亡、紀陰連（きのかげつら）は腹部が焼けた。悶乱、安曇宗仁（あずみむねひと）膝を焼かれて倒れ伏すというありさまであった。

そして、この落雷で、天皇も病に伏し起きれなくなったしまった。

理不尽な処置で人を死に迫いやれば、その怨霊はその罪を犯した人すべてに報復を加え、ついには最高責任者たる天皇をも殺しかねないのだという認識が当時の人々の間にすっかり定着してしまった。

939年12月、かの平将門は新皇即位の儀式をするが、そのときにも道真の怨霊が出てきて平将門をけしかける。このように道真の怨霊は実に執念深いのだが、人々の意識の変化とともに次第に怨霊の怨みもやわらいでいく。

以上のような経緯から、朝廷では、時の権力者藤原氏が、脅威を感じて、959年（天徳3年）に大規模な社殿を造営せざるを得なかった。そして、浄蔵の弟・道賢（後の名は日蔵）につて、道真の怨霊を鎮める儀式が行われたのである。永延元年（987）には、一條天皇の勅使が派遣され、国家の平安が祈念され、北野天満宮は誠に格式高い神社となった。北野天満宮の誕生である。

しかし、格式だけではない。北野天満宮のその後の努力のおかげで、北野天満宮は京都の人々にとって親しみのある神社となった。

北野天満宮の「もみじ苑」と「梅園」は見事であり、京都の人で出かける人は多い、

http://kitanotenmangu.or.jp/highlight.php#high_tp1

また、「天神さん」と言えば露天市のことで、京都では掘り出し物がないかと出かける人が少なくない。

https://www.youtube.com/watch?v=jAX_IUnmZgM

さらに、「ずいき祭」というのがある。これは、北野の神を10月1日から10月4日まで西ノ京の御旅所へお迎えして「ずいき御輿」を奉り、本年の収穫に感謝の誠心を捧げる祭である。誠に庶民的な祭だ。

http://kitanotenmangu.or.jp/info/%E6%9C%AA%E5%88%86%E9%A1%9E/news_3.html